

## 抑制要因に基づく大学生の援助要請行動の分類

野崎 秀正・石井 眞治

(2004年 9月 30日受理)

Classification of help-seeking behaviors based on the restrain factors

Hidemasa Nosaki and Shinji Ishii

The purpose of this study was to classify the help-seeking behaviors of university students based on the three restrain factors (Seriousness of problem, Threat for competence, Indebtedness). First, we collected various help-seeking behaviors by preliminary research. Then, we classified the 30 help-seeking behaviors collected in the preliminary research. Participants were 149 (67 men; 82 women) students enrolled in a Japanese university. The factor analysis showed the five patterns of help-seeking behavior (Seeking help for an emergency, Seeking trivial help in daily life, Seeking emotional support, Seeking valuable resources, Self-centered help-seeking). These five patterns have different characteristics from the point of restrain factors respectively.

Key words : Words: Help-seeking behavior, Classification, Restrain factors, University Students,  
キーワード : 援助要請行動, 分類, 抑制要因, 大学生

援助要請行動 (help-seeking behavior) とは、「もし、他人が時間、努力、あるいはある種の資源を費やしてくれるならば解決するような問題を抱えている個人が、直接的な方法で他者に援助を求める行為 (DePaulo, 1983)」と定義される行動である。援助要請行動研究は、援助する側の心理のみを対象としてきたそれまでの援助行動研究において、援助を受ける側の心理にも焦点を当てるという新たな方向性として確立した研究分野である (DePaulo, Nadler, & Fisher, 1983)。人の援助行動を、援助を要請する (help-seeking), 援助を与える (help-giving), 援助を受ける (help-receiving) という一連の対人行動として捉えた場合 (相川, 1989), 援助要請行動は相手の援助を引き出す前提となる行動であるといえる。そのため、対人関係における援助のやりとりが適切に行われることを促すためにも、援助要請行動のメカニズムについて検討することは重要である。

これまでの援助要請行動研究では、援助要請行動の促進及び抑制要因の解明や生起過程の分析に焦点を当てた研究がいくつか行われてきた。例えば、島田・高木 (1994) は、援助要請行動の抑制要因として状況認知要因と個人特性を特定し、両者がどのように援助

要請行動の生起に影響を及ぼすかについて検討している。また、相川 (1989) や高木 (1997) は、援助要請行動の生起過程モデルを提唱している。さらに、島田・高木 (1995) は、援助要請行動の意志決定過程を情報モニタリング法を用いることで実証的に明らかにしている。

これまで述べてきた研究は、社会心理学分野における援助行動研究の枠組みで行われてきたものであるが、そこで扱われている援助要請行動は、気分が悪いときに助けを求めるといった行動や道を尋ねるといった行動など多岐にわたる。これは、もともとの援助行動研究が、コンタクトレンズを拾う行動から骨髄提供までとかなり広い範囲の行動をその範疇に含めていた (松井, 1981) ためであり、また、先述したDePaul (1983) の定義がかなり広義なためであるともいえる。しかし、ある社会的行動を対象とした研究において、扱う行動や場面が多様すぎることについては、いくつかの問題点が指摘される。Pearce, Amato, Smithson (1983) は、援助行動研究では扱う行動や場面が多様すぎるために、個々の研究によって統一した知見が得られなかったり、場合によっては矛盾する結果が得られてしまったりするという問題点を指摘し

た。このPearceら(1983)の指摘は、援助行動研究だけでなく、研究ごとに異なる種類の援助要請行動が扱われている援助要請行動研究の場合においてもそのまま当てはまるといえる。

こうした問題点を解決する一つの試みとして、援助行動研究では、対象とする援助行動を類型化するという分類学的な視点からの検討が行われている。例えば、高木(1982)は、対にされた2つの援助行動の全体的な類似性の評定値を基に援助行動の分類を行い、「寄付・奉仕行動」、「分与・貸与行動」、「緊急事態における救助行動」、「労力を必要とする援助行動」、「迷子や遺失者に対する援助行動」、「社会的弱者に対する援助行動」、「小さな親切行動」の7つの行動類型を明らかにした。分類学的な研究によるアプローチは、援助行動を研究する研究者たちに、得られた結果と他の研究結果の差異や類似点を説明するための一定の枠組みを提供するという点で有益である(原田, 1998)。

こうした試みは、援助行動研究と同様の問題が指摘される援助要請行動研究においても行われるべきであるが、高木(1982)の研究で明らかになった結果をそのまま援助要請行動の研究に用いることには問題があるように思われる。つまり、高木(1982)が分類した援助行動は「献血」や「募金」のようなものも含まれており、こうした援助行動については援助要請者を特定することが困難である。また、援助行動には特に被援助者からの援助要請行動がなくても行われる種類のものがあるため、援助と援助要請が必ずしも対の関係になっているとはいえない。そのため、援助行動の分類とは別に援助要請行動についてもその収集と分類を新たに行う必要性があろう。

援助行動の分類学的研究における分類方法は、先述した、対にされた2つの行動の全体的な類似性の評定値をもとに行動を類型化するもの(高木, 1982)と、各行動が持っている種々の特性によって特徴付けられた行動間の類似性から行動を類型化するもの(高木, 1987)とがある。本研究では、後者の方法を採用し、援助要請行動を分類する基準として援助要請行動の抑制要因を用いる。これは、援助要請行動研究の焦点が主に抑制要因に焦点が当てられていること、また、行われる援助要請行動の内容の違いにより、その抑制要因が異なる(島田・高木 1994)といった理由による。

援助要請行動の抑制要因については、これまで様々な観点から検討されている。本研究で分類の基準とする抑制要因は、これまで比較的多くの研究で扱われているといった理由から、以下に示す「問題の重大性」、「自尊心への脅威」、「心理的負債感」の3つを特定す

る。

(1) **問題の重大性** 解決すべき問題が自分にとって重要でなかったり、緊急でなかったりした場合、援助要請行動は生起しない(島田・高木, 1994)。そのため、解決する問題の重大性の違いにより生起しやすい援助要請行動とそうでないものがあることが考えられることから、問題の重大性は援助要請行動の行動特性の一つとして捉えられるといえる。

(2) **自尊心への脅威** 他者に援助を求めることは、問題を解決できると同時に自己の能力の無さを露呈する行為にもなりうる。その場合、援助要請行動は独立心や能力感に対する脅威を引き起こすことになる(Fisher, Nadler, & Whitcher-Alagna, 1982)。こうした「自尊心への脅威」は、要請者の個人特性や援助者との関係などの観点から、これまで数多くの研究が行なわれている(西川, 1998)。一方で、自尊心への脅威が生じやすい援助要請行動かそうでない行動かというように種々の援助要請行動を特徴づける行動特性としても捉えることも可能であろう。

(3) **心理的負債感** 「心理的負債感」は、援助者に何らかのかたちで返報しなければならないという義務のある状態と定義される(Greenberg, 1980)。「心理的負債感」は低減させるべき認知動因であるため、人はできるだけこれを負わないよう援助を求めないようにする(相川, 1989)。「心理的負債感」の大きさは、要請者と援助者の関係や援助コストの大きさで決定される(相川, 1988)が、種々の援助要請行動を特徴づける行動特性として捉えることもできるだろう。

以上の議論より、本研究では、大学生を対象に「問題の重大性」、「自尊心への脅威」、「心理的負債感」の3つの抑制要因に関連した行動特性に基づき、種々の援助要請行動を分類することを目的とする。そのため、まずは、予備調査でなるべく多くの援助要請行動を収集し、いくつかの典型的な援助要請行動にまとめる。次に、まとめられた典型的な援助要請行動を、前述した3つの行動特性に基づき分類する。

本研究では、研究対象として大学生を選んだが、その理由は、ゼミ、サークル、アルバイトなど生活の場が多様な時期であることや、独り暮らしをしている学生も多いことから種々の援助要請行動を行う機会が多いことが予想されたためである。

## 予備調査

これまでに自分が困窮場面に陥ったとき他者に助けを求めた出来事と、周囲で見聞した出来事から援助要請行動のエピソードを想起させ、なるべく多くの援助

に整理することを目的とする。

方 法

**被調査者** 被調査者はH大学の大学生156名（男子53名，女子103名）であった。

**手 続 き** 質問紙による集合調査法により調査を行った。

**調査用紙の構成** 調査用紙は2問で構成され、「大学に入学してからこれまでの間、困ったり、苦しい状況のとき、実際に誰かに助けを求めたり、何かをしてもらうように頼んだ出来事」と「大学に入学してからこれまでの間、あなたの周りの誰かが他の誰かに助けを求めたり、何かをしてもらうように頼んでいた出来事」をできるだけ多く具体的に記述してくれるよう、自由記述形式で回答を求めた。

結 果

全ての被調査者から、述べ695個（男子211個，女子484個）の援助要請行動が想起された。そのうち自分の体験は492個（男子158個，女子334個）で、他者の体験を見聞したのは203個（男子53個，女子150個）であった。自分の体験と他者の体験では、その記述内容に大きな差異は見られなかったため、これらを合わせたものを3名の評定者によって内容の類似度の高いものを一つにまとめていくという作業を行った。何段階かに分けて分類を行った結果、最終的に、30種類の典型的な援助要請行動に分類された。

本 調 査

予備調査でまとめられた30種の典型的な援助要請行動を、問題の重大性、自尊心の低下の程度、心理的負債感の大きさという3つの行動特性に基づき分類することを目的とする。

方 法

**被調査者** 本調査の被調査者は予備調査の被調査者とは異なるH大学の大学生149名（男子67名，女子82名）であった。

**手 続 き** 質問紙による集合調査法により調査を行った。

**調査用紙の構成** 予備調査で得られた30種類の援助要請行動を（1）援助要請行動の原因となる問題がどれほど重大と感じるか、（2）援助要請行動を行う際にどれくらい自尊心の低下を感じるか、（3）援助要請行動を行う際にどのくらい援助者に対する返礼義務（心理的負債）を感じるか、の3点について「全く感じない」から「非常に感じる」までの5件法で回答を求めた。

結果と考察

本研究で得られたデータは、（被調査者）×（援助要請行動）×（行動特性）の3相データであったが、これを2相データに縮退させ因子分析（主因子法、Varimax回転）を行った。その結果、6因子が抽出された。因子分析の結果を表1に示す。

表1 援助要請行動の因子分析結果

因子	項目番号	援助要請行動	因子負荷量				
I	(4)	怪我をしたり、病気のとき病院に連れていってくれるよう頼む	.938	.117	.093	.021	.053
	(3)	川や海で溺れたとき助けてくれるよう頼む	.924	.066	.131	-.039	.029
	(1)	具合が悪くなったとき病院に連れていってくれるよう頼む	.895	.108	.112	.051	.078
	(16)	事故を起こしたとき、助けてくれるよう頼む	.804	.111	.240	.047	.076
	(18)	病気で寝込んだとき薬や食料を買ってきてくれるよう頼む	.754	.110	.191	.193	.212
	(14)	車や自転車が故障しているとき、助けてくれるよう頼む	.686	.222	.257	.100	.156
	(21)	怪我をしたとき、傷の手当てをしてくれるよう頼む	.663	.352	.273	.105	.183
	(17)	落とし物、無くし物を探してくれるよう頼む	.425	.415	.194	.298	.251
II	(23)	筆記用具など忘れたとき、貸してくれるよう頼む	.086	.693	.133	.016	.370
	(26)	道がわからなくなったとき教えてくれるよう頼む	.306	.616	.307	.036	.117
	(20)	機械の操作法など、わからない技術や技能を教えてくれるよう頼む	.207	.608	.289	.250	.033
	(11)	勉強でわからないところを教えてくれるよう頼む	.166	.588	.268	.288	.002
	(10)	自分では持てない荷物を持ってくれるよう頼む	.210	.537	.207	.259	.284
III	(15)	友人関係のことで相談に乗ってくれるよう頼む	.320	.272	.788	-.064	-.006
	(30)	進路関係のことで相談に乗ってくれるよう頼む	.394	.234	.731	-.051	.073
	(28)	寂しいときや不安なとき一緒にいてくれるよう頼む	.148	.187	.714	.043	.191
	(9)	恋愛関係のことで相談に乗ってくれるよう頼む	.280	.181	.673	.056	.049
IV	(5)	自分の課題やレポートと一緒に手伝ってくれるよう頼む	.039	.135	-.099	.746	.087
	(6)	クラブやゼミなどの仕事が早く終わるように手伝ってくれるよう頼む	.165	.206	.050	.682	.121
	(7)	生活費など必要なお金を貸してくれるよう頼む	-.017	-.046	.145	.641	.266
	(2)	授業のノートを貸してくれたり、代返してくれるよう頼む	-.045	.139	-.093	.539	.204
	(8)	交通手段が無かったり、不便だったとき車で送迎してもらうように頼む	.290	.089	.075	.445	.421
	(19)	お金の持ち合わせがないとき、貸してしてくれるよう頼む	.078	.203	.120	.414	.350
V	(24)	自分の代わりに買い物に行ってくれるよう頼む	.071	.087	-.006	.384	.666
	(25)	席をとっておいてくれるよう頼む	-.034	.447	.083	.167	.569
	(12)	忘れ物を持ってきてくれるよう頼む	.179	.222	.004	.349	.543
	(29)	家に泊めてくれるよう頼む	.343	-.009	.226	.190	.521
	(22)	本やCDなどを貸してくれるよう頼む	.266	.398	.045	.159	.473
	(27)	自分の代わりにアルバイトに入ってくれるよう頼む	.363	.110	.191	.329	.429
	(13)	暇なとき遊び相手になってくれるよう頼む	-.133	.349	.384	.102	.396

因子Iは「怪我をしたり、病気のとき病院に連れて行ってくれるよう頼む」、「川や海で溺れたとき助けてくれるよう頼む」など、事故や病気などの緊急事態における援助要請行動が多く含まれていたことから「緊急事態における援助要請行動」（以下、「緊急事態時の要請」とした。因子IIは、「筆記用具など忘れたとき、貸してくれるよう頼む」、「道がわからなくなったとき教えてくれるよう頼む」など日常的によく起こるちょっとした困窮場面における援助要請行動が多く含まれていたことから「日常のちょっとした困窮場面における援助要請行動」（以下、「日常の要請」とした。因子IIIは「友人関係のことで相談に乗ってくれるよう頼む」、「進路関係のことで相談に乗ってくれるよう頼む」など心理的なサポートを求める援助要請行動により構成される因子であったことから「心理的サポートに関する援助要請行動」（以下、「心的サポートの要請」とした。因子IVは「自分の課題やレポートと一緒に手伝ってくれるよう頼む」、「クラブやゼミなどの仕事が早く終わるように手伝ってくれるよう頼む」など、相手にとって貴重な資源（金品、時間、労力）の提供を求める援助要請行動が多く含まれていたことから「貴重な資源の提供を求める援助要請行動」（以下、「貴重な資源の要請」とした。因子Vは「自分の代わりに買い物に行ってくれるよう頼む」、「席をとっておいてくれるよう頼む」など、困窮場面とはいいがたい自分の利益のために行なう援助要請行動が多く含まれていたことから「利己的な援助要請行動」（以下、「利己的要請」とした。

次に、明らかになった5つの行動類型を独立変数として3つの行動特性別にそれぞれ分散分析を行った。従来の研究では、要請者の性によって援助要請行動に対する態度や生起傾向が異なることが指摘されている（野崎，2003a；山口・西川，1991）。そのため、まずは性（2）×行動類型（5）の2要因分散分析を行った。その結果、性の主効果、性と行動類型の交互作用はいずれも有意ではなかった。そのため、性差についてはその後の分析に含めなかった。行動類型のみを独立変数とする1要因分散分析を3つの行動特性別に行った結果、全ての行動特性において、行動類型間に有意な主効果がみられた（問題の重大性； $F(4, 744) = 105.84, p < .001$ 、自尊心への脅威； $F(4, 744) = 88.29, p < .001$ 、心理的負債感； $F(4, 744) = 146.19, p < .001$ ）。そこで、それぞれの行動特性について多重比較を行った。

まず、「問題の重大性」では、「緊急事態時の要請」、「心的サポートの要請」、「貴重な資源の要請」、「日常の要請」、「利己的要請」の順に高い値を示し、「貴重

な資源の要請」と「日常の要請」間以外は、全ての行動類型間で有意な差がみられた（図1）。

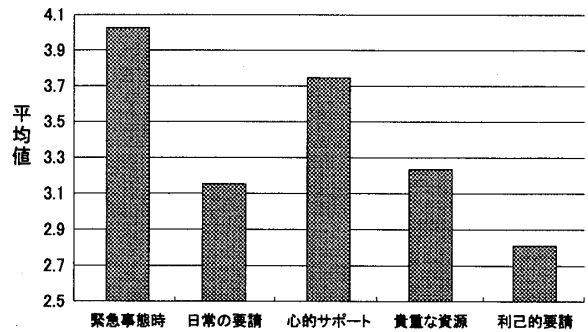


図1 「問題の重大性」の行動類型間比較

次に、「自尊心への脅威」では、「貴重な資源の要請」が他の4つの行動類型よりも有意に高い値を示し、逆に「緊急事態時の要請」が、他の4つの行動類型よりも有意に低い値を示した。残る3つの行動類型、つまり、「心的サポートの要請」、「日常の要請」、「利己的要請」間には、有意な差はみられなかった（図2）。

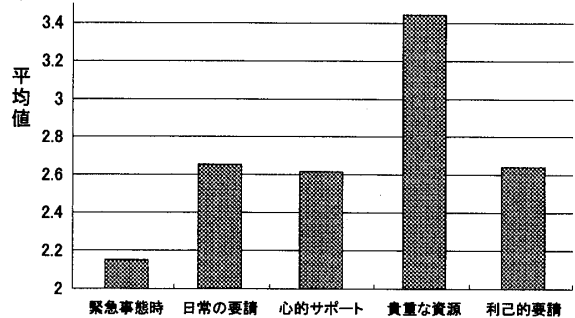


図2 「自尊心への脅威」の行動類型間比較

最後に、「心理的負債感」では、「緊急事態時の要請」、「貴重な資源の要請」、「利己的要請」、「日常の要請」、「心的サポートの要請」の順に高い値を示し、「日常の要請」と「心的サポートの要請」間以外は、全ての行動類型間で有意な差がみられた（図3）。

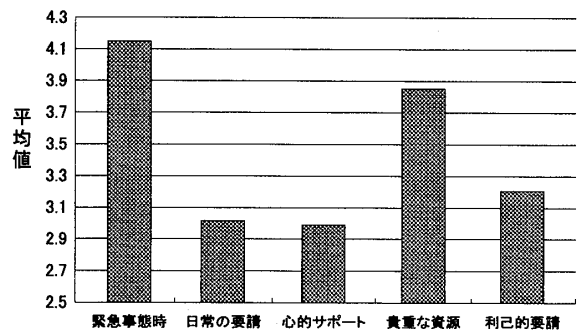


図3 「心理的負債感」の行動類型間比較

これらの結果を基に、5つの行動類型の特徴づけをする。

**(1) 緊急事態における援助要請行動**

この行動類型は、生命の危機に関する事態を含むことから問題の重大性は高い。また、自尊心への脅威は最も低かったが、この結果についてはこうした状況が要請者の統制可能性が低い状況であり、援助を求めて然るべき事態であると多くの人々が認知するためであることが考えられる。つまり、要請者だけで解決することが不可能な要請者の統制可能性が低い事態では、問題の原因を外的な要因に帰属しやすいために、援助要請を行うことが自尊心への脅威となりにくい(西川・高木, 1990)。一方、自尊心への脅威とは対照的に心理的負債感是最も高かった。これは、問題の重大性の結果からも明らかのように、この事態における援助の必要性は高いといえることから、援助を提供してくれた相手に対する感謝の念が特に高くなるためであろう。また、これらの援助要請行動に対する援助者の援助コストが高いということも援助要請者の心理的負債感の高さに関連すると考えられる(相川, 1988)。

**(2) 日常のちょっとした困窮場面における援助要請行動**

この行動類型は、「問題の重大性」、「自尊心への脅威」、「心理的負債感」の全ての行動特性で、低い値を示していた。これは、提供される援助が情報提供型のものを多く含むなど、求める援助の援助コストが低いためであることが考えられる。つまり、低い援助コストで解決できるために問題の重大性が低く、それに伴う自尊心への脅威や、解決した場合の援助者に対する心理的負債感も低いということが考えられる。

**(3) 心理的サポートに関する援助要請行動**

この行動類型で最も特徴的なのは、問題の重大性が高いにも関わらず心理的負債感是最も低いということである。この結果は、先述した「緊急事態時の援助要請」とは異なる。進路や対人関係での悩みや葛藤は、ストレスや鬱状態などの深刻な問題を招くこともある。そのため、こうした援助要請行動が必要になる事態は、問題の重要性が高いといえる。しかし、それにもかかわらず心的負債感が低いという結果については、提供される援助が情報提供型であるため、援助者が支払う援助コストが低いと認知されるためであると考えられる。「心理的負債感」や「自尊心への脅威」が他の行動類型と比較して低いという結果は、従来の臨床心理学分野の研究において相談行動がなかなか生起しないことが問題視されていること(水野・石隈, 1999)とは些か反する結果である。このことについては、心理的なサポートを求める相手として、より親密な友人などが想定されたためであるかもしれない。つまり、要請対象者として一度や二度援助を要請した

ところで相手からの評価が変わることのない親密な関係にある他者に援助を求める場合は、自尊心の低下は起こりにくい(西川, 1998)。そのため、相談行動のような自我に中心的な問題が原因となる援助要請行動でも、自尊心の低下は起こりにくいという結果が得られたのではないのだろうか。

**(4) 貴重な資源の提供を求める援助要請行動**

この行動類型は、「問題の重大性」、「自尊心への脅威」、「心理的負債感」の全てにおいて、比較的高い値を示しており、中でも「自尊心への脅威」が最も高いというのが特徴的であった。この行動類型で必要とされるのは、他者の時間や能力、金銭など「貴重な資源」である。すなわち、他者にそうした「貴重な資源」を求めるという行為が、能力や金銭などの「貴重な資源」を自分が持ち合わせていないことの露呈に繋がるため「自尊心への脅威」が高まりやすいのであろう。

**(5) 利己的な援助要請行動**

この行動類型は、「問題の重大性」が最も低いということが特徴的であった。自分の力で解決できる可能性があったり、それほど深刻ではない場合に行う援助要請行動は、依存性が高いものであったり、利己的な援助要請であるとされる(Nadler, 1998)。この行動類型が最も問題の重要性が低いと認知されたという結果は、この行動類型を「利己的要請」とした解釈が妥当であったことを示すと思われる。

**まとめと今後の課題**

本研究の結果から、大学生の援助要請行動は、30の典型的な行動にまとめられ、さらに、援助要請行動を抑制させる「問題の重大性」、「自尊心への脅威」、「心理的負債感」の3つの行動特性に基づいて、5つの行動類型に分類されることが明らかになった。これらの結果は、援助要請行動についての研究を行う際、研究者にどのような型の援助要請行動を対象に研究を行っているかという情報を提供することで、研究結果を解釈する際の一定の枠組みを提供したといえる。例えば、最近研究が行われている学業的援助要請(野崎, 2003a, 2003b)については、本研究における「勉強でわからないことを教えてくれるように頼む」に相当する援助要請行動であることから、「日常的要請」に位置づけられることが明らかになった。この結果から、少なくとも大学生にとっての学業的援助要請は、それほど重大性の高くない日常的な援助要請行動として位置づけられる型の援助要請行動であると結論づけられる。また、水野・石隈(1999)は、

情緒的問題の解決のためにカウンセリングとしての援助を求める行為を対象とした研究が、その他の種々の援助要請行動を対象とした研究とは本質的に異なるとしているが、本研究で、「心的サポートの要請」が一つの行動類型として分類されたという結果は、このことを裏付けるものであったといえよう。本研究では「利己的な援助要請」が一つの行動類型として明らかになった事も興味深い結果の一つであった。この行動類型は、Nadler (1998)が概念化した依存的援助要請 (dependent help-seeking) と類似した援助要請行動であるといえる。Nadler (1998) は、援助要請行動を、自律的で適応的な自律的援助要請 (autonomous help-seeking) と依存的で非適応的な依存的援助要請の2つに概念化し、これらを区別するべきであるとを主張している。援助行動研究においては、伊東 (1996) が、被援助者の視点から援助行動の質についての検討を行っているが、今後は、援助要請行動についても被要請者の立場から援助要請行動の質的側面を検討する必要がある。本研究では、種々の援助要請行動について、それらの行動を抑制させる行動特性をどれほど持ち合わせているかを検討した。しかし、それらの援助要請行動がどれほど生起するか行動傾向についての比較は行わなかった。今後は行動特性との関連から生起傾向も併せて検討する必要がある。また、本研究では援助要請行動の行動特性として「問題の重大性」、「自尊心への脅威」、「心理的負債感」の3つを特定したが、今後は、さらに詳細な行動特性からの分類を行う必要があると思われる。

## 【引用文献】

- 相川 充 1988 心理的負債に対する被援助利益の重みと援助コストの重みの比較 心理学研究, 58, 366-372.
- 相川 充 1989 援助行動 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一 (編) 社会心理学パースペクティブ1 個人から他者へ 誠信書房
- DePaulo, B. M. 1983 Perspectives on help-seeking. In DePaulo, B. M., Nadler A., & Fisher, J. D. (Eds.), *New directions in helping. Vol.2: Help-seeking*. New York: Academic Press.
- DePaulo, B. M., Nadler, A., & Fisher, J. D. 1983 *New directions in helping, Vol. 2: Help-seeking*. Academic Press.
- Fisher, J. D., Nadler, A., & Whitcher-Alagna, S. 1982 Recipient reactions to aid. *Psychological Bulletin*, 91, 27-56.
- Greenberg, M. S. 1980 A theory of indebtedness. In Gergen, K., Greenberg, M. S., & Willis, R. (Eds.) *Social exchange: Advances in theory and research*. New York: Plenum.
- 原田純治 1998 援助行動に対する分類学的アプローチ 松井 豊・浦 光博 (編) 対人行動学研究シリーズ7 人を支える心の科学 誠信書房
- 伊東秀章 援助行動の質-援助の質の高さと関連する性格特性とジェンダー- 実験社会心理学研究, 36, 261-272.
- 松井 豊 1981 援助行動の構造分析 心理学研究, 52, 226-232.
- 水野治久・石隈利紀 1999 被援助志向性, 被援助行動に関する研究の動向 教育心理学研究, 47, 530-539.
- Nadler, A. 1998 Relationship, esteem, and achievement perspectives on autonomous and dependent help-seeking. In Karabenick, S. A. (Ed.), *Strategic help seeking: Implications for learning and teaching*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 西川正之 1998 援助行動研究の広まり 松井 豊・浦 光博 (編) 対人行動学研究シリーズ7 人を支える心の科学 誠信書房
- 西川正之・高木 修 1990 援助がもたらす自尊心への脅威が被援助者の反応に及ぼす効果 実験社会心理学研究, 30, 123-132.
- 野崎秀正 2003 a 学業的援助要請の規定因に関する研究の動向と展望 広島大学大学院教育学研究科紀要第一部, 52, 73-82.
- 野崎秀正 2003 b 生徒の達成目標志向性とコンピテンスの認知が学業的援助要請に及ぼす影響-抑制態度を媒介としたプロセスの検証- 教育心理学研究, 51, 141-153.
- Pearce, P., Amato, P. R., & Smithson, M. 1983 Introduction and plan of the book. In Smithson, M., Amato, P. R., & Pearce, P. *Dimensions of helping behavior*. Oxford: Pergamon Press.
- 島田 泉・高木 修 1994 援助要請を抑制する要因の研究 I - 状況認知要因と個人特性の効果について - 社会心理学研究, 10, 35-43.
- 島田 泉・高木 修 1995 援助要請行動の意志決定過程の分析 心理学研究, 66, 269-276.
- 高木 修 1982 順社会的行動のクラスターと行動特性 年報社会心理学, 24, 187-207.
- 高木 修 1987 非援助動機の構造とそれに基づく非援助行動の特徴づけ 関西大学社会学部紀要, 19, 27-49.
- 高木 修 1997 援助行動の生起過程に関するモデルの提案 関西大学社会学部紀要, 29, 1-21.
- 山口智子・西川正之 1991 援助要請行動に及ぼす援助要請者の性, 対人魅力, 及び自尊心の影響について 大阪教育大学紀要 第IV部門, 40, 21-28.

(主任指導教官 石井眞治)